

# 中日両言語における 「性向語彙」についての対照研究

——「動物比喩語」を中心に——

施暉・李凌飛

要旨 「性向語彙」とは人間の生まれつきの性格や日頃の振る舞い、人柄などを捉えて表現する言葉の総体を指す。中日「性向語彙」には数多くの「動物比喩語」がある。それに関する実証調査及び対照分析を通じて、以下の結論が出せる。第一に、中国人は対人評価にあたり、牛、馬、羊、鶏など、家畜と家禽類の喩材を多用するのに対し、日本人は法螺（ほら貝）、フカ、ボウなど、魚介類の喩材の使用に関心を寄せる。第二に、虎や豹など、大型で独自に行動する動物の使用に傾く中国人に比べ、日本人は蟻、蜂など、小型で集団を重んじる動物の方を愛用する。以上の相違点は、中日両国の自然環境、飲食文化及び国民性などにおける独自性と深く絡んでいる。

キーワード 性向語彙 比喩語 動物喩材 文化言語学 日中比較

## “性向词汇”的汉日对比研究

——以“动物比喻词汇”为中心——

概要 “性向词汇”是指对他人的性格、日常行为及人品等加以评价时使用的词汇群体。通过对中日两国“性向词汇”中的“动物比喻”进行分析与比较，得出结论如下：第一，中国国民对人评价时青睐于牛、马、羊、鸡等家畜、家禽类喻体的使用；而日本国民侧重于海螺、大鲨鱼、鲑鱼等鱼类、贝类的喻体表现。第二，较之于多把虎、豹等体型大、独来独往的动物作为喻体的中国国民，日本国民喜好蚂蚁、蜂等体型小、注重团队意识的动物，凸显出中日两国在风土、饮食、国民性等文化层面的独特性。

关键词 性向词汇 比喻词汇 动物喻体 文化语言学 汉日对比

## はじめに

“劳模”（働き者）、「働き者」、「일꾼」（働き者）などのように、世界各民族の言語に幅広く存在し、他者の生まれつきの性格や日ごろの振る舞い、性格、態度などを評価の観点に基づいて把握、表現する言葉のまとまりを「性向語彙」と呼ぶ（室山2001: 6）。「性向語彙」は単に、他者を評価する指標、すなわち対人評価語彙として機能するだけでなく、それと同時に、自らが行動する場合の行動モラルの具体的な指標としても機能するものである（室山2001: 6）。日本の方言における性向語彙では「人間」を「動植物」「自然現象」などに見立てる「擬自然化」などの造語法が盛んであるという（室山2012: 3）。中日両言語（共通語）における性向語彙にも、人と自然物、事物、人物、身体といった意味カテゴリーとの類似性に着目し、つまり比喻発想による比喩的な対人評価語が数多く存在する。例えば、嫉妬心を戒めるため、中日両国ではそれぞれ“小鸡肚肠”「焼き餅」などの比喩語が使用されている（施・欒2016）。

性向語彙における比喩語<sup>1)</sup>はメタファー、メトニミーなどを中心とした認知手段の活用を通じて造語され、日常生活に深く根を下ろし、数が多いだけでなく、新鮮さと面白さにも富み、生き生きとした対人評価を行っている。また、喩えられる対象によって、かかる比喩語を「動物化、植物化、金属化、自然現象化、名人化、身体化」などの多様なカテゴリーに細分できる（施・欒2018: 16）。性向語彙の比喩語には、「当該集落の社会構造の特性が明確に反映しており、その意味で一種の社会的制約が認められるとしなければならない」と室山（1992: 4）が論じているように、比喩語の生成及び応用は各民族の社会、文化、生活環境等に支えられるものであると言えよう。従って、比喩語についての多言語間の対照研究は、それぞれ言語文化間の異質性を浮き彫りにする有効な方法の一つであると考えられる。

---

1) 本論文では井上（2001, 2008）を参照し、性向語彙における「語形式」と「句形式」の比喩表現を、合わせて「比喩語」と呼ぶ。

本論文は性向語彙に使用される動物比喩語についての調査、統計、分析を通じ、中日両言語の共通点と相違点を探り出そうとすることが目的である。また、文化言語学的な視座<sup>2)</sup>から、主に両言語の相違点を切り口に、比喩発想に潜んでいる社会的、文化的要因及び中日それぞれの特徴などの解明を試みる。今回実証調査から得た中日両国のデータを分析資料とした本論文は、従来の研究を検証、補足する一方、今後の研究の方向性を明示することにも役立つものと考えられる。

## 1. 先行研究

地域社会で用いられる「方言性向語彙」に着目し、研究の重要性を初めて指摘したのは、藤原与一である。藤原は1962年に愛媛県肥海地域方言における「性向語彙」を調査した。それが発端で、室山敏昭、灰谷謙二、井上博文などの学者は方言性向語彙の採録及び研究に取り掛かった。ここで特筆に値するのは、方言学者の室山敏昭である。室山は藤原が「方言性向語彙」を研究する価値を指摘した後、30年以上に亘る実地調査を続け、性向語彙に関する研究を推し進め、新天地を開き続けてきた。従来指摘されてきた日本社会の「タテ」構造<sup>3)</sup>と違い、日本社会の根底には「ヨコ」性の秩序原理<sup>4)</sup>が存すると論破している。

性向語彙における比喩発想の造語法については、早くから日本の学者に注目されるようになり、また著しい研究成果が挙げられている。例えば、室山(1992)は山口県防府市野島方言に対する調査結果に基づき、当地の方言性向語彙に関する比喩語の造語法を転生法と複合法に分けて詳しく考察を行っ

---

2) 「文化言語学」は、言語と文化との関係に力点を置いた研究分野である。言語は、文化の諸相を反射するプリズムで、文化の影響から免れられない一方、文化に能動的に影響すると唱えている。

3) 中根(1967)は社会組織を「タテ」と「ヨコ」に分類している。序列意識に基づくのは「タテ」組織である。

4) 「ヨコ」性の秩序原理とは、「過度の競争主義」や「過度の能力主義」ではなく、「中流意識」及び協調的な「関係主義」を尊ぶ社会構造である(室山2001: 213)。

た。また、喩材のカテゴリーを基準に比喩語を分類すると同時に、地域の自然環境及び社会環境がどのように比喩語の生成に影響するかを解明した。方言性向語彙における比喩語が明らかに地域性をもって浸透していることは、井上（2008）による農業地域と漁業地域に用いられる方言性向語彙に関する対照研究でも検証された。さらに室山（2012）は長年に亘って、「擬自然喩」「擬物喩」「精神の身体化」といった3つのカテゴリーを最上位とし、さらに13の下位項目からなる方言比喩語の分類法を明示した。それは最善の分類法として、今までに日本は勿論、中国の学界にも甚大な影響を及ぼしており、比喩発想による言葉の意味拡張に繋がる認知要素と文化的、社会的要素を探り出す示唆ともなりうる。一方、中国側は李（2009）、施・欒（2017, 2018）などが挙げられる。李（2009）は中日韓の大学生300名を研究対象に、比喩表現の分類、意味機能、文化的背景などを手掛かりに、三言語の造語法について比較した。施・欒（2017, 2018）は李（2009）に基づいて三国の社会人と大学生、合わせて690名を対象に調査項目の増加、補足調査と追加調査などを行った。そのうえ、性向語彙の使用語彙数のトップ10の意味項目に現れる比喩語を取り上げ、定量的に比較分析を行い、三言語の共通点と相違点を浮き彫りにした。

「性向語彙」については、日本において多くの研究成果が上げられているものの、殆ど方言研究の分野に止まっているばかりで、共通語及び異文化間の対照研究については今日に至っても緒に就いたのみという現状である。中国も、「性向語彙」に関する研究はまだ始まったばかりの段階にある。従って、多国の共通語における性向語彙を中心に、実証的対照研究を積極的に進めることは、多言語間の性向語彙の全体像を把握するには大いに寄与すると言えよう。

## 2. 問題提起及び研究方法

### 2.1 問題提起

本論文の目的は以下の通りである。第一は、対人評価にあたって、中日両

国人は動物喩材の選択において異同があるか否かを明らかにすることである。第二は、中日性向語彙における動物比喩語を巡って異なり語彙数と延べ語彙数という二つの統計方法<sup>5)</sup>によって、両者の量的な差異を究明しようとするのである。第三は、両者の相違点をもたらす要因について探ることである。

## 2.2 計量分析

### 2.2.1 データベース

本論文に用いられるデータは、施暉・欒竹民のグループが作成した「中日韓三国性向語彙コーパス」から抽出されたものである。施・欒は室山によって創案された「方言性向語彙調査票」<sup>6)</sup>をもとに、中日韓三国の文化的特徴を反映できる5つの評価項目<sup>7)</sup>を付け加え、合計111の評価項目からなる調査票<sup>8)</sup>を作成した。本調査は2003年7月から2014年12月にかけて、中日韓の社会人それぞれ130名、大学生それぞれ100名、合わせて690名を対象にアンケート調査を行った。具体的な方法は、調査対象に111の評価項目に当てはまると思う言葉を自由式で各項目の( )に記入させる形をとった。収録された性向語彙の総語彙数は、表1のとおりである。

---

5) 「異なり語彙数」は、言葉の多様性を根拠とし、同じ単語が何回用いられても1語と計算し、全体で異なる単語がいくつあるかを統計する。「延べ語彙数」は、言葉の多様性を無視し、同じ単語でも用いられる度ごとに加算して得られる総数で統計する。

6) 室山(2001)は、意味と評価を2つの基軸とし、まず、性向語彙の全体を「動作・行為の様態に関するもの」「言語活動の様態に関するもの」「精神の在り方に関するもの」という3つの意味分野に大きく分節した。さらに各意味分野の内部を4段階からなる階層構造に細分し、合わせて106評価項目を構築した。

7) それぞれ、「気前の良い人」「人付き合いの良い人」「面子を重んずる人」「個性の強い人」「嫉妬心の強い人」である。

8) 紙幅の制限があるため、調査票と111評価項目の詳細は施・欒(2017:14-19)を参照されたい。

表1 中日韓三言語における「性向語彙」の総語彙数（施・樂2018: 16）

国 別	中 国		日 本		韓 国	
	異なり 語彙数	延べ 語彙数	異なり 語彙数	延べ 語彙数	異なり 語彙数	延べ 語彙数
男 性	5,696	13,013	4,897	8,578	3,971	9,797
女 性	5,634	11,068	4,426	9,584	3,511	10,361
男女合計語彙数	9,279	24,081	8,062	18,162	6,072	20,158
男女共有語彙数	2,501		1,261		1,410	

### 2.2.2 統計方法

動物喩材及び語彙数を統計する方法は、以下のようである。

(1) 111の評価項目ごとに、まず「中日韓三国性向語彙コーパス」に収録された語例について逐一に確認しながら、動物喩材を含める性向語彙を全部抽出した。

(2) 語源辞典などを参考に、あるいはネイティブスピーカーに確認することにより、メタファーとメトニミーを代表とする比喩造語法を駆使するかしないかを基準に、(1)で抽出された性向語彙は動物比喩語であるかを判断した。

(3) (2)で動物比喩語と判明した言葉などは語例として、評価項目とともにExcel表に記入した。当該語例の延べ語彙数は各語例の後の( )に記入した。以上の方法で動物喩材ごとに、各々の動物Excel表を作成した。

(4) Excel表ごとに、各動物喩材による比喩語の異なり語彙数と延べ語彙数を計算した。まず、各々の評価項目で語例の数を足し算すると、その項目の異なり語彙数となる。一方、各語例の後に付け加えられた数を合計すれば、延べ語彙数である。その次は、111の評価項目の異なり語彙数と延べ語彙数を加算し、総異なり語彙数と総延べ語彙数がわかる。以下に中国語の“牛”を例として、具体的な統計方法を見てみよう。

中日両言語における「性向語彙」についての対照研究

評価項目	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1 第1項目 (働き者)	老黄牛 (14)	牛人 (6)	牛 (2)	牛叉 (1)	孺子牛 (1)	老黄牛 (1)	老牛 (1)	26	7
2 第4項目 (仕事を丁寧・丹念にする人)	老黄牛 (3)	老牛 (2)						5	2
3 第5項目 (丁寧すぎる人)	牯牛角尖 (12)	牯牛角尖的 (6)	牛角尖 (2)					20	3
4 第6項目 (辛抱強い人)	老黄牛 (19)	老牛 (2)	牛犛 (1)	犛牛 (1)	牛人 (1)			24	5
5 第7項目 (人一倍に仕事に熱中する人)									
6 第9項目 (仕事の手先)									
7 第10項目 (仕事の遅い人・要領の悪い人)									
8 第101項目 (あっさりした人)									
合計								378	106

図1 “牛”を喩材とした比喩語(中国語)の統計表凡例

“牛”について、第1項目「働き者」には“老黄牛”などの7つの異なった語例が比喩語と判断された(図1)。従って、枠ⅡのJ2のように、異なり語彙数を7語と数えた。また、語例の後につけられた数字は延べ語彙数を示すが、評価項目ごとに、すべての語例の延べ語彙数を加算すると、各評価項目における比喩語の延べ語彙数となる。たとえば枠ⅠのI2の数字、すなわち26は“牛”を喩材とした全ての比喩語が第1項目における延べ語彙数である。さらに“牛”を使用したすべての評価項目の異なり語彙数と延べ語彙数をそれぞれ総計すると、“牛”による比喩語の総延べ語彙数(枠Ⅲ、378語)と総異なり語彙数(枠Ⅳ、106語)となる。なお、他の動物比喩語についても“牛”と同じ方法で検索、統計を行った。

ここで注目されるのは、“老黄牛”は第1項目「働き者」、第4項目「仕事を丁寧・丹念にする人」、第6項目「辛抱強い人」、第7項目「人一倍に仕事に熱中する人」、第9項目「仕事の手先」、第10項目「仕事の遅い人・要領の悪い人」及び第101項目「あっさりした人」といった評価項目で同時に使用できる点である。これは「同形異義語」と呼ばれる。つまり、一つの単語が幾つもの評価項目に使われる言葉である。それらの言葉は形は同じであるが、違う評価項目に使われれば、違う意味を指す。そのため、「異なり語彙数」を集計する場合は、回数ごとに加算することにした。

### 2.2.3 統計結果

中日性向語彙に用いられる動物喩材及び比喩語の語彙数を統計した結果は、表2のようになる。

表2から、中日両言語は、喩材の数、総異なり語彙数と総延べ語彙数にお

表2 中日性向語彙における動物喩材と比喩語の語彙数

国 別	中 国			日 本		
	喩材 の数	異なり 語彙数	延べ 語彙数	喩材 の数	異なり 語彙数	延べ 語彙数
哺乳類	20	307	1,281	13	38	69
昆虫類	9	46	123	6	31	280
鳥類	8	60	249	6	10	22
爬虫類	3	18	46	2	10	30
魚介類	1	4	7	5	16	94
想像類	1	4	4	1	3	4
両生類	1	3	21	1	3	16
合 計	43	442	1,731	34	111	515

いて、以下のような相違点が見られる。

(1) 動物喩材の分類については、朱 (2011: 10) などの研究成果を参照し、主に生物学の分類法を基準にした。中日両言語はともに、全ての動物喩材を哺乳類、昆虫類、鳥類、爬虫類など大きく7類に分けられる。その中の想像類は現実の動物を元に架空に作り出されたものを指す<sup>9)</sup>。まず、喩材の数については、哺乳類、昆虫類、鳥類という順番で、トップ3を占めることが中日共通である。しかしながら、喩材の総数からみれば、中国語は日本語の34種を上回り、43種あり、より多様性と変化に富んでいることがわかる。

(2) 総異なり語彙数については、中国語と日本語はそれぞれ442語と111語である。中国語が日本語をかなり上回ったことから、室山が帰納した性向語彙が備わる「程度性の拡張的細分化」<sup>10)</sup>という特徴が中国語の方が明らか

9) 想像類に分類された喩材について、中国語の“龍”、日本語の「天狗」が挙げられる。この2種の喩材を動物喩材にみなす理由は、実在の動物を原型に作り出されたためである。

10) かなり多くの意味項目において、全ての性向語彙の内、意味の外延性が最も大きく、しかも使用頻度が最も高い言葉が語基となって、多くの派生形を生成しているのが察知できる。なお、派生した言葉は、評価の度合いにおいて、程度の差がある(室山2004: 399-400)。

に察知できる。すなわち、日本語と比較すると、中国語の性向語彙における動物比喩語の方が形式も多様であり、程度性の区別も細かく、多重構造を持っているということである。例えば、第67項目「口数の多い人・おしゃべり」において、中国語の“吹牛”はそれだけでなく、“愛吹牛”“吹牛大王”“瞎吹牛”などの言葉も派生し、風刺、揶揄の程度は“吹牛”<“愛吹牛”<“吹牛大王”<“瞎吹牛”というように強くなっている。

(3) 総延べ語彙数については、中国語と日本語はそれぞれ1731語と515語で、中国語は日本語の3倍ほど多くある。中国人は動物喩材を以て他人を評価し、また自分を律する意欲は日本人より積極的であることがわかる。

### 3. 中日性向語彙における動物比喩語の喩材と語彙数

#### 3.1 喩材

図2は「中日韓三国性向語彙コーパス」から抽出された全ての動物喩材を指すものである<sup>11)</sup>。言うまでもないが、比喩は人間が世界を認識するうちに形成されたもので、違う国であっても、似ているところがある(曹・王2019: 48)。中日両国人は長い歴史の中で動物との接触において勿論共通する

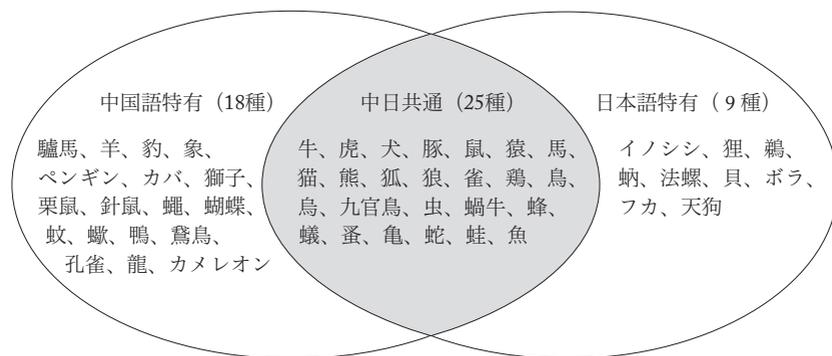


図2 中日性向語彙における動物喩材

11) 図2には「鳥」「虫」「魚」「貝」がある。一体どの下位項目の動物であることを明示していないので、そのまま表記することにした。

面がある。性向語彙に絞ってみれば、図2のように「牛」をはじめとする25種の動物喩材は、両言語ともに用いられる。

一方、中日両国では自然環境、歴史文化、風俗習慣などにおいて違う面もある。そのため、図2からもわかるように、日本人と中国人が特有に使用する動物喩材は、それぞれ9種と18種である。言い換えれば、動物喩材を使用する際に、両言語の独自性がある。

中国は内陸国であり、恵まれた自然環境が牧畜業を発達させたのに対し、日本は海に囲まれた島国であるため、漁業が盛んである。自然環境の相違は動物喩材の使用に大きな影響を与える。中国独特の動物喩材である“驴”“羊”“鴨”“鵝”などは中国ではありふれた家畜（家禽）である。それらの喩材による比喩語は豊富多彩であり、中国文化の特徴を鮮明に表している。例えば、“驴脾气”を使うことによって第41項目「怒りっぽい人」を評価し、“老山羊”で第87項目「優しい人」を誉めたたえる。また、“鸭子嘴”“呆头鵝”といった言葉を通じて第70項目「口下手な人」を揶揄することもできる。中国語と異なり、「法螺」「貝」「ボラ」「フカ」などの魚介類に属する喩材を多用するのは日本語の特徴である。例えば、第73項目「誇大家」、第48項目「意地汚い人」、第50項目「大酒飲み」はそれぞれ「法螺吹き」「ボラ」「フカ」に見立てられる。中国文化と異なる日本文化の特徴は、以上の比喩語を使用することから浮き彫りにできる。

人間はもともと動物、植物あるいは他の自然物と血縁関係を持つと信じられたことから、トーテム崇拝思想が生まれたと言われている（宋1997: 28）。トーテム崇拝だけではなく、自然界を人格化することにより、神話伝説を虚構するのも各民族に好まれている。トーテム崇拝と神話伝説が各民族にもたらした影響は言語を包含する多方面に及び、往々にして根強く残っている。その影響は中日性向語彙における動物比喩語からも見出される。例えば、中国語には、“出则龙入则虫”という諺がある。“虫”と“龙”を比較することによって、第29項目「外では陽気だが家では無口な人」を辛辣に批判する。中国で“龙”は蛇などの動物を組み合わせた上で架空された動物であるが、中華民族のトーテムとみなされ、中国伝統文化と切り離せない存在であ

るといえよう。他方、「天狗」「天狗になる」「天狗の鼻」など、「天狗」を中心に創り出された対人評価語は日本語にしかなく、第64項目「自慢する人」などを評価したりするものである。また、うぬぼれを戒める訓戒を伝えながら、自分と他人の行動を規制する。杉原（2007: 31-32）の考証によると、日本の天狗は中国の天狗を原型としながらも、山伏の服装、赤ら顔で鼻が高く、鳥のような翼がある全く新たなイメージに改造されたという。鼻が高いことを特徴とする天狗は『平家物語』など文学作品の中にも頻繁に登場し、日本社会に知れ渡っているといってもいい。「龍」と「天狗」はそれぞれ中日両国の民族文化の影響を受けた上で架空された動物であると同時に、それらを使うことによって民族文化を代々継承させようとする。また、文化言語学的な視点から考えると、文化と言語は互いに機能しながら人間の言語行動を支えることが一層鮮明になっている。

### 3.2 比喩語の語彙数

中国語と日本語の性向語彙に用いられる各動物喩材の異なり語彙数と延べ語彙数をランキングすると、両言語はいずれも各動物喩材の間には顕著な差が見られる。例えば、中国語の場合は、“牛”に関連した比喩語の異なり語彙数と延べ語彙数はともに第1位であり、それぞれ106語と378語である。また“牛”に対して、“松鼠”“蚊子”“蝸子”“变色龙”などの動物を喩材とした比喩語の異なり語彙数と延べ語彙数は、ランキングの最後に位置し、いずれも1語だけである。

各動物喩材による比喩語に関する語彙数の上での顕著な差については、以下の原因が考えられる。まず、語彙数の多寡は物事に対する関心度と正比例の関係成している。関心度が高ければ高いほど、それに関係する表現は豊富多彩となり、造語も複雑になっていると施・欒（2017: 9）は指摘した。その反面、動物比喩語の異なり語彙数が少ないのは、その動物に対する関心の度合いが低いからであろう。また、造語の斬新さは比喩の根本であると言われていたが、造語の認識度と受容性を前提に考えなければならない（施・欒 2018: 22）。したがって、比喩語の延べ語彙数が下位にランクされるのは、や

表3 中国語における「異なり語彙数」と「延べ語彙数」トップ10位の動物喩材

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
喩材	牛	虫	猪	狗	鸡	虎	猴	驴	鼠	马	狐	鸟
異なり語彙数	106	29	26	25	23	21	18	18	15	13	13	13
喩材	牛	马	鸡	猫	猪	虎	狐	虫	狼	鼠		
延べ語彙数	378	181	118	112	103	97	96	95	74	54		

より受容性の低いことが裏付けられている。

以下に、異なり語彙数と延べ語彙数がともにトップ10位に入った動物喩材だけを取り上げて比較、分析を試みる。まず、表3に示したように、中国語の場合は、異なり語彙数と延べ語彙数が両方ともにトップ10位に入ったのは、“牛”“虫”“猪”“鸡”“虎”“鼠”“马”“狐”である。その中で、中国人に一番愛用されているのは“牛”であり、40以上の使用項目に達している。牛は中国文化において如何に大切な役目を演じているかがここから推察される。たとえば、“老黄牛”を例に説明してみると、褒め言葉として、第1項目「働き者」、第4項目「仕事を丁寧・丹念にする人」、また第6項目「辛抱強い人」などの評価項目に使われている。また、人を揶揄し、貶す場合に用いられることもある。第10項目「仕事の遅い人・要領の悪い人」を“老黄牛”に見立てるのはその一例である。“牛”のほか、第8項目「怠け者・仕事をしない人」を“懒虫”、第96項目「馬鹿者」を“蠢猪”、第94項目「ずる賢い人」を“老狐狸”に見立てて評価を行っている。さらに、“小鸡肚肠”と“鼠目寸光”を第111項目「嫉妬心の強い人」に、“虎头蛇尾”を第26項目「気分の変わりやすい人」を警告したりする比喩に用いるのは、中国語独特の比喩表現であり、日本語と好対照をなしている。

日本語の場合は、異なり語彙数と延べ語彙数ともにトップ10位にある動物喩材は8種類であり、「虫」「法螺」「鼠」「馬」「蛇」「蛙」「蜂」「蟻」である。表4からわかるように異なり語彙数といい、延べ語彙数といい、「虫」を喩材とした比喩語は圧倒的に多く、虫に関連する比喩語は15の評価項目に使用されている。例えば、「働き虫」「金食い虫」「臆病虫」などの比喩語

表4 日本語における「異なり語彙数」と「延べ語彙数」トップ10位の動物喩材

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
喩材	虫	法螺	猫	鼠	馬	蛇	亀	蟻	犬	狼	雀	貝	蛙	蜂	天狗
異なり語彙数	20	9	7	7	6	5	5	4	4	3	3	3	3	3	3
喩材	虫	法螺	馬	蛇	蜂	蟻	蛙	九官鳥	蚤	鼠					
延べ語彙数	229	84	33	24	22	19	16	10	8	7					

を以て、それぞれ第1項目「働き者」、第57項目「浪費家」、第27項目「小心な人・臆病な人」を評価している。ここで特に注目しているのは、第1項目「働き者」を評価する際は、「働き虫」の他、「コマネズミ」「働き蜂」「働き蟻」などの比喩語も駆使される。日本人が以上の喩材を使用する心理は、毛の随筆（1996:4）の一節と合致している。つまり「日本人は精、織、専に丹念し、秩序と集団を重んじ、正確さ、真面目さ及び瑣末を追求し、（中略）、このような習慣と心理は、まるで蟻や蜜蜂などの社会性に富んでいる小虫のようである」（筆者訳）。「虫」に引き続き、「法螺」を喩材とした比喩語は、異なり語彙数と延べ語彙数が両者ともに第2位を占めている。ここから海洋文化が日本民族と日本文化に与えた影響が鮮明に見られる。「法螺」に関連する喩材については「法螺吹き」の使用頻度が一番である。それぞれ第21項目「大胆・豪胆な人」、第64項目「自慢の人」、第71項目「嘘つき」、第72項目「口のうまい人・口から出任せを言う人」、第73項目「誇り大家」及び第74項目「冗談言い」、合わせて6の評価項目に巧みに使われている。他には、「野次馬」を以て第60項目「でしゃばり・お節介焼き」を揶揄し、第105項目「しつこい人」を「蛇」に見立てるのは、日本文化の特殊性を刻んだ使い方であり、日本語独特のものである。

異なり語彙数と延べ語彙数がともにベスト10位に入った中国語の8種の動物喩材と日本語の8種の動物喩材を合わせて考えると、「法螺」「牛」「豚」「鶏」「虎」「狐」「馬」「鼠」「蛇」「虫」「蜂」「蛙」及び「蟻」といった13種類の動物がある。図2からわかるように、以上の13種類の動物喩材は、「法螺」を除いて、中日両言語でともに使用されている。12種類の喩材による

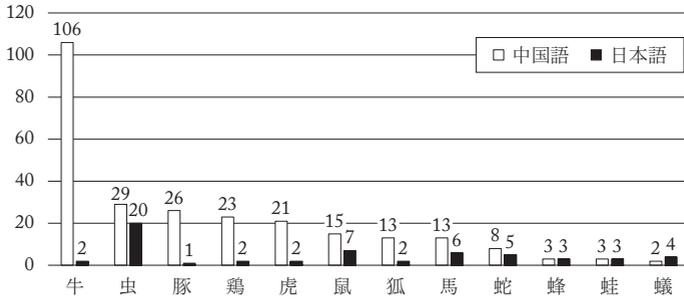


図3 中日動物比喩語の異なり語彙数

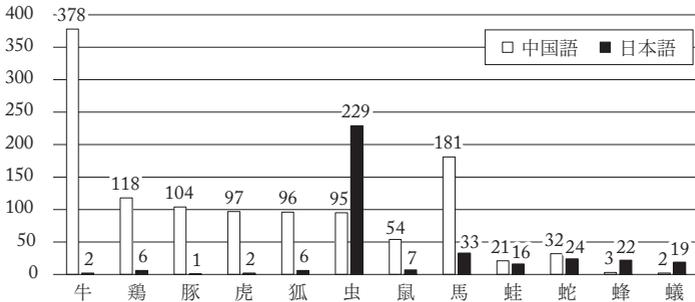


図4 中日動物比喩語の延べ語彙数

比喩語の異なり語彙数と延べ語彙数をヒストグラフで比較すれば、図3と図4のとおりである。

図3と図4を通じて以下の結論がまとめられる。

(1) 「蛇」と「蛙」を喩材とした比喩語については、異なり語彙数にせよ、延べ語彙数にせよ、中日両言語の間には著しい差が見られない。

(2) 「牛」「豚」「鶏」「虎」「鼠」「馬」「狐」を喩材とした比喩語については、異なり語彙数といい、延べ語彙数といい、中国語の方は日本語を上回り、圧倒的に多いことが指摘できる。

(3) 「蜂」「蟻」を喩材とした比喩語については、異なり語彙数であれ、延べ語彙数であれ、日本語より中国語は少ない。一方、「虫」を喩材とした比喩語について、中国語の異なり語彙数は、日本語のそれより少し多めにあ

るが、延べ語彙数になると、日本語の方がかえって中国語の2.5倍ほどである。日本語の造語力は中国語ほど豊富ではないが、「虫」を対人評価に使用する意欲からみれば、日本人の方が積極的であると言ってもよからう。

以上のように喩材と語彙数といった視点から、中日性向語彙における動物比喩語の比較、分析を進めた。動物との類似性に注目することで比喩語を作り出し、さらに対人評価に使用する上で、中日両言語の間には共通性があるものの、動物喩材の選択及び各喩材に対する認知度と受容性に関して、両言語の相違は著しく見られる。その主な相違点は以下の2点にまとめられる。

(1) 中国人は家畜、家禽に属する喩材の使用を好むのに対し、日本人は魚介類の喩材を多用する。

(2) 中国人は大型の動物喩材（牛、虎など）を多く使用しているのに対し、日本人は小型の動物喩材（蜂、蟻など）を多用している。

#### 4. 中日相違点の文化言語学からの考察

##### 4.1 家畜、家禽類を多用する中国語と魚介類を多用する日本語

中日性向語彙における動物比喩語の相違点の一つは、家畜、家禽類の喩材の使用に傾くか、魚介類の喩材に傾くかということである。図3と図4からわかるように、“牛”“馬”“猪”“鸡”などの家畜と家禽類の喩材は、中国人の対人評価に常用される。また、図2に示されているが、“驴”“羊”“鸭”“鹅”などは中国語だけに活用される喩材である。これと対照的に、「法螺」「サメ」「ボラ」などの魚介類の喩材は、中国語に使用されず日本語に特有のものである。各言語における比喩語の造語は各民族の日常生活との緊密さと大切さに関わっている（呉・楊2000: 116）ことが文化言語学で強調されているが、上述した相違点の背景には、以下の要因が考えられる。

牛、馬、驢馬、羊、豚、鶏、家鴨、鶯鳥などが中国人に重んじられてきた肝心の要因の一つは、生産活動に役立つものということである。中国人にとって、家畜、家禽の重要性は、以下の方面に具現される。まず、牛について、農耕を中心とした中国では、春秋時代から掛け替えのない働きを発揮し

てきた。農業が機械化された現代中国社会においても、多くの地域では、牛は依然として欠かせない生産手段である。また、昔から牧畜を生業とし、勇猛で戦いが上手であった少数民族は中国北方の草原に散居してきた。彼らにとっては、牛より馬のほうが貴重な宝物である。西北地方のモンゴル人の間では、相手の馬の尻を叩き褒めることを出会った際のあいさつとし、“拍馬屁”という言い方さえ作り出された（鄭2005:198）。戦国時代、趙の武靈王は胡人から服装、騎馬と弓取を学び、中原地方に普及させた。それをきっかけに、各民族の交流と融合は進む一方で、馬の飼養範囲も西北地方から全国に広がった。戦争が勃発した際には、兵士の仲間として共に敵に向かい、勇往邁進したが、平和な時期には牛や驢馬などの家畜と一緒に交通などの用途に用いられていた。

また、牛、馬、驢馬と比較すると、羊、豚、鶏、家鴨、鶯鳥などは直接的には生産活動での役割を果たしていないが、中国飲食文化の中においては、重要な構成部分として中国人に重んじられている。中国は農業社会に転換して間もなく、五穀を中心に肉類などを組み合わせた飲食構造が形成され、今日に至るまで発展してきた。そのうえ、飲食に関するタブーはあまり多くはないようである（万2011:23-24）。篠田（1974:10）によると、中国商の時代から残された甲骨文の研究を通じて、当時天子は牛を食べ、諸侯は羊を食べ、大夫は豚を食べ、士は犬を食べるという記録があるという。また、春秋戦国時代から鶏、家鴨、鶯鳥を食べる習慣があることも指摘された（篠田1974:33）。

しかしながら、以上の家畜、家禽が日本社会において発揮した働きは中国には遠く及ばない。中国の稲作文明の影響を受け、日本も弥生時代に農耕社会に転換したものの、佐伯（1967:203）によると、牛耕が徐々に日本に普及したのは鎌倉時代以降のことである。また、馬となると、日本の歴史の流れにおいて、貴族が権力を掌握した時代においても、武士が台頭した時代においても、馬は権力の象徴として専有される高価、貴重な財物で、一般の百姓はなかなか接触できなかった（斎藤2002:32）。

さらに飲食文化からみれば、日本は中国と異なり、神道の「穢れ」思想と

相まって、また、仏教の影響も受けて、古く天武天皇の時代から江戸時代にかけて「殺生禁断の法令」が何度も発布され、豚、鶏、牛は全部食用が禁止されるものに包括されていた。明治時代の後期に入ると、西洋思想の浸透につれ、肉食を禁止する習慣は徐々に廃れ、豚、牛、鶏を食材とする料理も日本人の食卓に登場するようになったが、中国人がそれらを食用する歴史と比べると、かなり遅れたと言っても過言ではない。それに、羊や家鴨、鷺鳥を食べることは、今日に至るまで、日本に定着しなかった。日本人の飲食について、矢野（1983: 18）は以下のように指摘している。「四面を海に囲まれる日本人と魚のかかわりあいは、稲作文化よりずっと太古からであり、日本人の主たるタンパク質源はほとんど魚介類に求められてきた」。つまり、島国に生活する日本人にとって、牧畜業より、漁業の方が生存を保障する根本であった。中日両国の飲食文化における顕著な相違も性向語彙における比喩語の喩材を選択する違いに繋がっていると考えられる。

#### 4.2 大型の動物喩材を多用する中国語と小型の動物喩材を多用する日本語

動物喩材を性向語彙に使用する中日相違点のもう一つは、中国人は虎、豹をはじめとする大型の動物に傾いているが、日本人は蜂、蟻を代表とする小型の動物に関心を寄せるとのことである。呉・楊（2000: 118）に指摘されているように、民族心理、美意識、価値観などは比喩表現に影響する重要な要因である。

##### 4.2.1 「小」を美とする日本人と「大」を美とする中国人

蜂、蟻などの虫類の喩材を虎、豹などと比較すれば、前者は体型が小さく、後者は大きいとの相違は歴然としている。日本人は「小」を美とするのに対し、中国人は「大」を美とするといった国民性の違いは、先行研究に強調されている。韓国学者の李御寧（2007）は日本文化の特徴を「縮み志向」というキーワードで捉え、またそれを立証するために、数多くの実例を挙げている。例えば、日本の童話に登場する英雄は往々にして巨人ではなく、一寸法師のような蛙の餌ほどの小さい人物の方が多い。小さいというより、むしろ小さいだけに、力強い敵を退治し、成功を収めていた。中村

(1962: 23-24) は中日両国の自然観を比較した上で、「われわれは、自然愛好という点ではシナ人も日本人も共通でありながら、茫漠としたとりとめのない、或いはわれわれから若干の隔たりのある表象内容を愛好するシナ人の思惟方法と、単純な小さくまとまった表象内容を愛好する日本人のそれとの相違を認めることができる」とまとめている。また、戴 (2005: 148-149) は以下の言説を通じて、中日両国人が追求する違った格式をより浮き彫りにしている。「もしわれわれが彼らの徳性、品格から分析すると、崇高、偉大、優雅、精緻といった4つの品性のうち、最も恵まれているのは優雅と精緻であり、欠けているのは崇高と偉大、とりわけ偉大である。中国の古代人に美しいものを列挙させると、日月星辰、碧霞蒼穹などが度々出てくる(後略)」(筆者訳) ということである。つまり、日本人にとっては、美とは精緻と繊細のことである。その反面、中国人の目は壮大、茫然から美を見出すといえよう。中日両国の美意識における違いも、対人評価に用いられる動物喩材の相違を引き起こす一因であると考えられる。

#### 4.2.2 集団を重んじる日本人と個性を追求する中国人

蜂、蟻が虎、豹(集団行動の猛獣)と区別されるもう一つの特徴は、蜂、蟻は種族のために一団となり、せかせかと集団に貢献しながら一生を過ごす。虎、豹などは個性が強く、単独で行動する性質を持っているということである。2011年4月23日付の『朝日新聞』には「こつこつ働くアリと楽しく生きるキリギリスとどちらが好きであるか」を質問としたネット調査の結果が掲載された。4091人がその質問に答えたが、アリを選択した人は78%を占めている。主な理由は蟻のようにこつこつ働くのは大切であるということである(施・薬2017: 144)。その結果から、日本人は互いに協力し、集団のために自己利益さえ捨ててもかまわないという国民性が検証されている。

もちろん、団結は伝統的な中国社会においても重んじられてきた徳目である。ただし日本式の団結とは違いがあり、中国の団結は家族を中心にするという要点を見逃してはいけない。また、現代の中国社会では、社会構造の転換に従い、個性を追求し、効率を第一とした価値観が、中庸、時代の波に身を任せるなどの伝統思想に取って代わりつつある。それについて、「個人主

義社会の中国では『個性がある人』というのは最高の褒め言葉である」と王(2000: 201)に指摘されている。同様の指摘はほかにもある。例えば、金(2007: 114)は個性を推尊するかどうかを中日韓三国の社会的特徴を弁別するポイントの一つにしている。「中国・韓国は西洋個人主義的な思考で、個人をまず優先させます。日本では能力のある個人が出てくると押さえつけますが、中国・韓国では個人主義が強く、個人が頑張って何かをやり遂げる時には認められます」との見解を述べている。すなわち、日本社会には集団主義が変わりなく波紋を及ぼしているが、中国社会では個人主義に拍車加えられている。単独で行動する虎と集団で働く蜂を中日両国それぞれの新たなトーテムとみなしてもよからう。

## おわりに

人を動植物や事物などに見立てることで、すなわち比喩発想による比喩語は、中日「性向語彙」に数多くある。本論は「中日韓三国性向語彙コーパス」に基づき、「性向語彙」における動物比喩語をめぐり、「喩材」「異なり語彙数」及び「延べ語彙数」などの視点から中日対照研究を行った。両言語の間には共通したところもあれば、著しい相違点もあることが明らかになった。その上、文化と言語は互いに影響するといった文化言語学の理論に立脚し、自然環境や飲食文化、国民性といった文化的な諸要因を手掛かりに、両言語が動物比喩語の使用に現れる独自性の考察も試みた。

まとめていえば、第一に、牛、馬、豚、羊、驢馬、鶏を代表とした家畜あるいは家禽は中国人の日常生活、生産において重要な働きを果たしているがゆえに、対人評価の喩材に多用され、豊富な比喩語が作り出された。一方、日本人にとって、漁業が生業に高い比重を占めているため、魚介類の喩材をもとにした比喩語の使用は、日本語の性向語彙の特徴である。第二に、中日両国の国民性を論じた先行研究では、「小」を美とし「集団」に力点を置く日本人に対し、中国人は「大」を追求し「個性」を一人前になる印とみなすことがしばしば指摘されている。それを背景に、蟻や蜂など小型で集団で活

動する昆虫類の喩材は日本人に好かれるが、中国人は虎や豹など大型で単独で行動する喩材を使用する傾向性がある。

中日両言語の性向語彙における比喩語に関する研究は、まだ着手されたばかりの段階にあるが、今後、方言比喩と共通語比喩との異同、また比喩語に関する分類法、使用項目、意味特徴、正負評価といった多様な角度からより深く細かく研究を行うべきである。なお、通時的な視座から、比喩語の発想や、諺を代表とした他の語彙体系との関連性などを探り出すのも有意義な課題である。それらの研究を通じて、中日両国人の対人評価の全貌を浮き彫りにすることができるだけでなく、言葉の意味生成と変遷、さらには言語と文化との関係を解き明かすことにも助力できる。

付記：本稿は2017年国家社会科学基金項目「日中韓語中的“表人比喩詞彙”対比研究」（17BYY219）及び蘇州大学委托項目「中日性向詞彙中的“詞綴”対比研究」による研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 井上博文（2001）「方言性向語彙の造語法」『学大国文』第44号，pp.1-24.  
井上博文（2008）「方言性向語彙の比喩語—農業地域と漁業地域との対照—」『学大国文』第51号，pp.21-38.  
王少鋒（2000）『日・韓・中三国の比較文化論』明石書店。  
金文学（2007）『日中比較優劣論』南々社。  
佐伯有清（1967）『牛と古代人の生活』至文堂。  
斎藤正二（2002）『日本人と動物』八坂書房。  
篠田統（1974）『中国食物史』柴田書店。  
施暉・樂竹民（2016）「中日両言語における『性向語彙』についての対照研究—『嫉妬心の強い人』を中心に—」『中国学研究論集』第34号，pp.118-129。  
杉原たく哉（2007）『天狗はどこから来たか』大修館書店。  
鄭高詠（2005）『中国の十二支動物誌』白帝社。  
中村元（1962）『東洋人の思维方法』春秋社。  
中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係』講談社。  
室山敏昭（1992）「方言性向語彙における比喩の生成と構造」『国文学攷』第132・133号，pp.1-12。  
室山敏昭（2001）『「ヨコ」社会の構造と意味—方言性向語彙に見る—』和泉書院。  
室山敏昭（2004）『文化言語学序説—世界観と環境—』和泉書院。

中日兩言語における「性向語彙」についての対照研究

- 室山敏昭 (2012) 『日本人の想像力』 和泉書院.
- 矢野憲一 (1983) 『魚の文化史』 講談社.
- 李御寧 (2007) 『「縮み」志向の日本人』 講談社.
- 李成浩 (2009) 『中国・日本・韓国三言語における大学生の「性向語彙」についての対照研究』 中国伝媒大学出版社.
- 曹金波・王丹 (2019) 「從認知視角看日漢“猫”的概念隱喻」 『東北亜外語研究』 第3号, pp. 41-49.
- 戴季陶 (2005) 『日本論』 九州出版社.
- 毛丹青 (1996) 『発見日本虫』 中国青年出版社.
- 宋長宏 (1997) 『中国牛文化』 民族出版社.
- 施暉・纒竹民 (2017) 『中日韓三国“性向詞彙”及文化比較研究』 外語教学与研究出版社.
- 施暉・纒竹民 (2018) 「中日韓三国“性向詞彙”中的“比喻詞彙”对比研究初探」 『東北亜外語研究』 第2号, pp. 16-24.
- 呉国華・楊喜昌 (2000) 『文化語義学』 軍事誼文出版社.
- 万建中 (2011) 『中国飲食文化』 中央編訳出版社.
- 朱銀花 (2011) 『日中韓三国語言中動物文化比較研究』 吉林大学出版社.

施暉 Shi Hui 蘇州大学外国語学院教授 専門：日本語学・日中言語文化比較  
李凌飛 Li Lingfei 蘇州大学外国語学院博士課程 専門：日本語学・日中言語文化比較